

一番身近な里山《竹林》の整備と活用

対象：小学生から社会人まで

人数：高校生以上 15 人(小中学生はカウントしないが単独は無し)

教科/分野：竹林(里山)整備

授業時間数：2 年間(年 10 回・合計 20 回)但し講義を含むものは前半の 1 年(10 回)、後の 1 年は在るべき姿の竹林にするための竹林整備(10 回)を継続実施する。

場所：長南町・長柄町

ESD プログラムへの 想い	一番身近な里山である竹林を整備することにより、どのような変化が起きていくのかを体験していくことで、自然環境の変化が自分たちの未来にどのような影響を与えることになるのかを知るきっかけになれば良いと思う。
目標	<ol style="list-style-type: none"> ① 竹(竹林)から、日本の民族文化と暮らしを知る。 ② 竹は管理次第で、持続可能な生活素材や食材となることを体感する。 ③ 竹素材の可能性を学習する。 ④ 日本の暮らしの原点である里山再生の第一歩とする。
特徴	<p>下記の点を意識したプログラムとなっています。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①伐採整備するだけでなく、素材の活用を実際に体験してもらう。 ②実際に販売(購入してもらう)までを体験する。 ③販売するには、トレーサビリティを重視する必要がある、その為に長期の整備期間を設定。(実際は2年ではなく半永久)
持続可能な社会づくりの構成概念	<ul style="list-style-type: none"> ・ 責任制、連携性、相互性 <p>もともと里山は人々の生業としての山であり、エネルギー革命によって荒廃が始まった。一度人の手の入った里山は、責任をもって管理しないと自然環境の破壊につながる。それは一地域の問題ではなく、ひいては生物多様性の破壊につながって行く。その現実を今、私達は身をもって体感している。そしてさらに今、里山の破壊の根源となったエネルギー革命の弊害によって、里山の暮らしの復活が可能になるかもしれない。</p>
重視する能力・態度	<p>竹林整備は危険を伴う仕事なので、連携・協力を最も必要とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 進んで参加する態度 ・ 他者と協力する態度 ・ コミュニケーションを行う力 ・ 多面的、総合的に考える力
プログラムの流れ	

時間	ねらい	方法・場所	内 容
1回 (半日 3時間)	整備された竹林と未整備竹林の違いを知る。また竹の種類を知る。	現地体験 (整備・未整備竹林) 講義	まず、2つの竹林を歩き何が違い何を感じたかを発表してもらい、その後、講師による竹林のあるべき姿や有用性について講義をしてもらう。(未整備竹林1時間・整備竹林2時間を予定。参加スタッフが質問も受ける) プロジェクトの次回以降スケジュール内容発表。
2～3回 /1日 (約5時間)	竹及び竹製品と日本文化の関わりを知る	玩具・日用品・装飾品等の製作 (場所は炭小屋)	まず日本の生活の中で如何に竹が活用されていたかを知ってもらおう。そして今その殆んどが、プラスチックに代わってしまっている事も知ってもらおう。また、製品を作りながら、今ならではの活用方法等を考えてみる。(2回は午前中、竹製品と日本文化の関わり等の講義。午後は玩具作り。3回はそれぞれが作りたい製品を製作)
4回/ 半日 5～7回 /1日	竹林のあるべき姿を知り、その維持に必要な知識を得る。 (作業道具の使い方の習得)	整備の手順と方法を実際に学ぶ。 (未整備竹林)	枯れた竹の搬出方法・残すべき竹の選び方・将来の姿等を学びながら実践。また整備の過程での竹パウダー・ポラス炭の生産の体験も行う。また昼食は、竹筒のご飯炊き、そうめん流し。お箸や器作りも。(4回は作業午前中、食事して終了。5～7回は9時～3時の1日) 全作業スタッフが指導しながら行う。
8～9回/ 3月～4月	残すべき筍(親竹)おいしい筍の選び方を知る。	筍の掘り方・後処理の方法をまなぶ。	竹林を維持して行く為に残す親竹用の筍の選び方と目印の付け方、そしておいしい筍の見つけ方や掘り方を教わりながら筍掘を楽しむ。また筍の刺身、焼筍などその場でしかできない味を食す体験も。(食後解散) [竹の種類によって収穫時期が違って来る]
10回 /4月末	新しい竹林の活用を学ぶ。	メンマ用竹の子の収穫と納品体験	国産(千葉県産)メンマとして販売するため、成長しすぎた筍をスタッフの指導のもとノコギリ等で収穫し、加工場まで納品する。そしてその後(初夏)製品となり店頭と並び、商品になったメンマを確認したうえで食す(感想をレポート)。
SDGs との関連性	目標 12：持続可能な消費と生産のパターンを確保する。 目標 15：森林の持続可能な管理、並びに生物多様性損失の阻止を図る。		
学校・地域等との連携上の考慮	会場となる里山の近隣の人達との連携を図る。		
対象を発展させる可能性	放置竹林についてはどの地域でも起きている問題なので、この体験がそれなりの成果を上げることができれば大きな連携体ができる可能性はある。		
その他補足事項	竹林(里山)整備が収益につながるという事を前面に出していきたい。このイベントで筍・メンマの収穫・納品に参加してくれた人には収益を分配します。		

※プログラムの流れに関しては、スタート時期によって順番が変わってきます。

プログラム作成者名(団体名)：千葉美賀子(一般社団法人もりびと)